星槎大学機関リポジトリ

論文種別	教育実践報告
タイトル	オンライン国際交流会の実施とその振り返り ――小学校外国語教育における国際教育観の育成――
Title	An online international exchange meeting and its review: Nurturing a view of international education in elementary school foreign language education
著者	戎嶋直子・三輪建二
Author(s)	EBISUJIMA, Naoko & MIWA, Kenji
誌名	星槎大学大学院紀要
Citation	*Seisa University Research Studies in Education*
巻	Vol.4
号	No.1
ページ	pp. 17-28
発行日	September 29, 2022
URL	http://id.nii.ac.jp/1486/00000287/

教育実践報告

オンライン国際交流会の実施とその振り返り
――小学校外国語教育における国際教育観の育成――

戎嶋直子[a]・三輪建二[b]
（星槎大学大学院教育実践研究科）

要旨

筆者が外国語指導補助員として携わっている勤務校のひとつである A 公立小学校で、ニュージーランドの小学校とのオンライン国際交流会が、20XX 年 11 月に実施された。開催にあたり、第 6 学年の学級担任らと児童らとともに、交流会に向けての準備をすすめた。まず、相手国についての調べ学習を行い、日本の四季折々の行事と学校施設・学校給食について紹介する準備を行った。その後リハーサルを経て、交流会当日を迎えた。

本実践のねらいは、主に児童らの国際教育観の育成と外国語学習の意義を明らかにすること、また学級担任の外国語教育観の育成である。本実践の結果、相手国について調べ学習をしたのちの「交流したい」という児童らの気持ちが、本学習すべての出発点になり、準備段階から交流会当日までの児童らの積極的な姿勢や主体的に取り組む態度につながった。そして、その「交流したい」という児童らの気持ちの中には、相手を受容し、共生することのできる態度・能力、また自国を理解・尊重する態度も含まれていると考える。さらに、交流後には、児童らの外国語学習に対する学習意欲も高まった。これらのことから、本実践は、児童らの国際教育観の育成の事例になりえるものであると評価できる。また、外国語学習においては、知識・技能の向上が最優先の目的ではなく、まずは相手を知りたい、相手から理解してもらいたいという気持ちが児童らの学習意欲の動機づけになると言える。そして、学級担任らにおいては、言語活動の重要性やこのような交流の機会の必要性について考えてくれた上で、また児童らの学習意欲向上からも、どのようにすれば児童らに交流に必要な英語力やコミュニケーション力を身につけさせられるのかという自身らの指導力や授業に対する課題意識を持ってくれたと言える。

キーワード：小学校外国語教育、国際交流会、国際教育（国際理解教育）、異文化理解、共生、省察（振り返り）

2022 年 9 月 7 日受理
[a] 星槎大学大学院教育実践研究科専門職学位課程
[b] 星槎大学大学院教育実践研究科教授

はじめに

筆者が外国語指導補助員として携わっている勤務校のひとつであるA公立小学校で、ニュージーランドの小学校とのオンライン国際交流会が、20XX年11月に実施された。6年生の児童らにとって、初めてのオンライン国際交流会である。2020年以降のコロナ禍の影響で、小学校では学校行事が減り、さらには児童同士、あるいは児童らと地域の方々や外国人留学生等の他者との関わりが難しくなっている。このような状況だからこそ、筆者が携わる外国語科で、児童らの成長や学級担任の経験の積み上げになるようなことができないかと多方面に働きかけ、今回のオンライン国際交流会を開催するに至った。なお、本実践は、通常授業時と同様に、学級担任と筆者によるティームティーチングで行った。

本報告書は、オンライン国際交流会当日までの準備と実施の内容、そして児童らと学級担任ら、また筆者の振り返りについてまとめたものである。なお、本報告書内における振り返りシートの内容や発言等に関しては、学校長と学級担任らの承諾の上、掲載している。

1. 研究の背景と先行研究

1)国際交流において大切な“交流したいという気持ち”

国際交流において大事なことのひとつは、交流したいと想う児童らの気持ちである。また、交流したいと想う気持ちの中には、相手を知りたい、理解したいという気持ちのほか、自分のことも知ってもらいたいと願う気持ちが含まれていると考える。このような交流したいと想う気持ちが、外国語学習の中での主体的な態度や積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度につながり、児童らの学習意欲の動機づけになるのではないかと考える。また、交流を通して多様な価値観に触れることで、視野が広がるだけでなく、自分自身が大切にしている価値観を確認することができたり、互いの価値観の擦り合わせによって生まれる新たな価値観に出会うことができたりすると考える。

これまでも国際理解教育や異文化理解教育の観点から同様の国際交流に関する活動報告や実践記録等は見られる。しかし、それらは、学習者の国際的資質・能力や学習意欲等に関する事後や段階的な意識変容に関するものが多いと考える（木村・黒上・谷口，2020；森田他，2005）。しかし、本実践は、交流したいと想う児童らの気持ちが出発点になり、児童ら主体の授業展開の中で、自ずと国際教育のねらいに達成するという点において特徴的な実践研究である。

2)国際教育の内容

国際教育とは「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」（文部科学省，2005，p.3）である。そのねらいは「①異文化や異なる文化を持つ人々を受容し、共生することのできる態度・能力、②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立、③自らの考えや意見を自ら発信し、

具体的に行動することのできる態度・能力の育成」（文部科学省，2005，p.2）である。そして「国際社会を生きる人材として必要な実践的な態度・能力を育成していくため、国際教育の実践力の向上と『学びの広がり・深まり』をもたらす授業づくり」（文部科学省，2005,，p.3）が必要である。

3)小学校外国語教育に国際教育の視点を取り入れる背景と意義

小学校学習指導要領（文部科学省，2018）の改訂において、高学年における外国語科導入の趣旨と要点として、グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、様々な場面で必要とされ、その能力の向上が課題であり、高学年の目標のひとつである「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から授業の改善・充実を図るとしている（同，pp.62-64)。また、外国語学習においては、知識・技能の向上だけではなく、児童らの学びの過程全体を通して、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことにより獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要であると示されている（同，p.64)。そして、外国語科では、実際に英語を使用して、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動が重視されている。言語活動は、相手意識と目的意識をもって活動することが必要とされており、伝えたい相手がいることと伝えたい内容があるということが重要である。

英語を手段として、互いのことについて伝え合うことができる国際交流は、児童らの学びを広げたり、深めたりすることができる。さらには、国際教育が目指している国際社会を生きる人材として必要な実践的な態度・能力を育成することもでき、小学校外国語教育に国際教育の視点を取り入れた授業を行うことの意義はあると考える。

2. 国際交流会当日に向けての準備

国際交流会が開催されることが、20XX年6月中旬に決定された。決定と同時に、6年生の児童らに、国際交流会を開催することを告げ、交流先の小学校のホームページ上にあった写真や動画を見せ、交流先の学校の様子や子ども達のイメージを持たせた。

児童らとは、まず7月に、ニュージーランドについての調べ学習を行った（4時間)。9月～10月には、日本について紹介するための準備を行った（4時間)。そして、11月に入り、リハーサルを行い、交流会当日に向けての調整を行った（2時間)。交流会当日は、6年生2クラスが、各教室で、それぞれ約40分間の交流を行った。

本交流会に関して、はじめに相談をしたのが、小学校近隣にある大学の国際交流センターである。そして、その国際交流センターと交流があるニュージーランドの大学の教授が、クライストチャーチにある小学校を紹介してくれた。また、国際交流センターのセンター長でもある大学教授から、教育現場での勉強をかねて、小学校・中学校の英語教員を目指

している学生に交流会のお手伝いをさせていただけないかという申し出があったので、学生らには交流会当日とその直前の授業に参加、協力をしてもらうことになった。

1)相手国について調べたことを発表する（４時間）

交流会は、当初９月に実施する予定だったため、児童らとは７月初旬から交流会当日に向けての準備を行った。まずは、児童らに相手国について知り、理解を深めてもらうために、ニュージーランドについての調べ学習を行い、クラス内で発表会を行った。

(1)調べ学習のテーマ決め

１時間目（７月２日）では、事前に児童らからアンケートを取っていた調べたいテーマを列挙し、グループ分けを行った。テーマについては、時間短縮のため、筆者が提案したものでもよかったが、学級担任らと相談し、児童らに決めさせた。テーマについては、６年１組が、①行事、②町並み、③食べ物、④有名スポット、⑤地理（面積・人口・気候など）、⑥スポーツ、⑦文化・風習・歴史、⑧有名人、⑨鉄道、６年２組が、①行事、②観光地、③食べ物、④地理、⑤スポーツ、⑥文化、⑦歴史、⑧民族、⑨貨幣に決定された。児童らそれぞれが希望するテーマに分かれ、グループ活動を行う準備ができた。

(2)発表スライドの作成

２時間目（７月８日）と３時間目（７月９日）では、各グループで発表スライドの構成を考えて、原稿を作り、スライドを完成させた。まずは、筆者が作成したサンプルスライドを見せ、最終的なゴールをイメージさせた。児童らは、伝えたいことがたくさんある中で、紹介したいポイントを絞ったり、聞き手のことを考えて、構成をデザインしたりしていた。そのグループでの話し合いは、互いを尊重し、譲り合いながら、行われていた。本学習中、児童らが主体的・対話的に、かつ集中して取り組んでくれた要因は、児童ら自身で選択し、決定したテーマについて調べたからであると感じた。

(3)調べ学習による成果発表

４時間目（７月 16 日）では、調べたテーマについて、グループごとに発表した。最後に、筆者からの講評を行い、振り返りシートに記入をしてもらった。

児童らの発表は、問いかけやクイズ形式を取り入れたり、表やグラフを用いて日本のものと比較したりし、聞き手に興味を持たせるような工夫がたくさんなされていた。鉄道をテーマにし、ひとりでも調べたいと言った児童については、主体性を尊重し、ひとりで取り組ませた。テーマについての焦点化がなかなか進まなかったが、ニュージーランドの踏切と標識について、日本のものと比較し、発表していた。また、ニュージーランドの国旗から歴史についての発表をしていたグループもあり、児童らの学びになっていた。

(4)成果発表後の児童の振り返り

振り返りシートの最後に「交流に向けての今の気持ちは？」という質問を加えていた。その質問に対する回答を整理すると、「交流への興味・関心・意欲」「外国人への親和性」

「異文化への興味・関心・意欲」「英語力」の４つに整理することができた。以下に、児童が書いたものを抜粋し、そのまま掲載する。まず、交流への興味・関心・意欲については、「Do you know ～ ？ や Do you like ～ ？ と、色々聞きたい。」「日本のどんなことを知っているのかが知りたい。」「日本のこと（文化など）を伝えたい。」「日本とはこんなに違うんだよと伝えたい。」「直接交流することは、インターネットで調べるよりも、詳しいことがわかると思うので、すごく楽しみです。」「ニュージーランドに興味ができたので、交流が楽しみです。」「成功させたい。」等、次に、外国人への親和性については、「ニュージーランドの人たちにも楽しんでもらえるようにしたい。」「ニュージーランドに行ってみたい！そして、一緒にスポーツをしたい！」「ニュージーランドについて少し知れたので、話が合いそうだと思った。」「ニュージーランドの人たちと会話できることは、自分にとっては夢のようです。」「日本はいい国だと思ってもらいたい。」等、そして、異文化への興味・関心・意欲については、「民族衣装を見たい。」「もっと色々なことを調べたい」「日本との違いを比べたい。」等、最後に、英語力については、「うまく話せるようになれたらいいなと思う。」「発音を良くする。」等、交流に向けての気持ちを書いてくれた。

以上の児童らの振り返りから、本学習における成果は２つある。ひとつは、英語力に対する不安や心配もあるが、「聞きたい」「知りたい」「伝えたい」等の「交流したい」という気持ちが児童らに芽生えたことである。また、その上で「楽しみ」という交流会に向けての期待が高まり、さらには交流会を「成功させたい」と思ってくれた。児童らそれぞれが調べ学習に取り組み、それぞれのグループ発表を聞いたことで、相手国や交流する相手のイメージが深まり、交流会当日に向けての期待感が醸成されたと考える。もうひとつは、「楽しんでもらえるようにしたい」「話が合いそう」「いい国だと思ってもらいたい」等のニュージーランド人への親和性に関する表現が、振り返りシートの中で見られたことである。これは相手に対する尊重の気持ちや親切な態度のあらわれであると考える。

2)日本について紹介するための準備（４時間）

今度は、同じ学年の児童らとともに、日本について紹介するための準備を行った。文部科学省（2005, p.2）が、異文化や異なる文化を有する人々に対して敬意を払い、理解し受容することは、自国やその歴史、伝統・文化を理解・尊重し、その上に立脚した個性を持つ一人の人間として自己を確立することによってはじめて可能となると述べているように、ここでは、日本について知り、理解することも重要な過程になる。

前時までの調べ学習と同様、役割を決め、グループ活動を行った。外国語科の教科書『*Here We Go!* 6』（小泉・加賀田，2020）の内容である日本の四季折々の行事と学校施設・学校給食について調べ、紹介スライドを作成した。日本や学校について知り、理解を深め、日本の良いところやニュージーランドとの違い等を伝えられるように準備をした。

それから、８月下旬にニュージーランドでコロナウィルス感染者が１名報告されたこと

により、全土ロックダウンした影響で、交流会実施日が９月から 11 月に延期になった。

(1)交流会当日の役割決め

１時間目（９月３日）では、まず、交流会当日の役割を決め、グループ分けをした。そして、各グループに分かれて、紹介したい内容について話し合った。２クラスとも、①司会、②始めの挨拶、③日本の行事について（春・夏・秋・冬）、④学校について（学校施設・学校給食）、⑤終わりの挨拶の９つの役割分担が決まった。

(2)紹介文作成

２時間目（９月 10 日）では、紹介内容の原稿を書く作業に取り掛かった。筆者は、主に司会班と挨拶班、学級担任は紹介班の指導にあたった。

(3)紹介文と紹介スライド作成

３時間目（９月 17 日）と４時間目（10 月１日）では、紹介スライドを完成させた。２時間目と同様、筆者は、主に司会班と挨拶班、学級担任は紹介班の指導にあたった。紹介班は、紹介文に写真を付け、伝えたい内容をどのように伝えるかを考えながら、作成していた。完成していくにつれて、児童らの顔つきが変わっていくのがわかった。これは主体的な学びのあらわれであると考える。

3)交流会直前のリハーサル（２時間）

２時間のうち１時間は、交流センター職員（３人）と学生（６人）に参加、協力をしていただいた。職員については、学生引率者と機材協力者、ニュージーランド人の職員である。学生については、小学校・中学校の英語教員を目指している大学１・２年生である。

(1)本番さながらのリハーサル

１時間目（11 月 11 日）では、交流センター職員と学生らに協力をいただき、機材の接続等も含めたリハーサルが行われた。まず、学生らに、児童らのサポートをしていただきながら、各グループでセリフ練習→進行と動作の確認→リハーサルの順で授業を進めた。リハーサルでは、実際に国際交流センターと Zoom で繋ぎ、ニュージーランド人の職員に発表を聞いてもらった。前時から一か月以上という時間が空いていたが、交流会に向けての児童らの意欲や積極性等は変わっていないと感じた。

(2)授業後の学生らからの感想

授業直後、控室にて学生ら一人一人に今日の感想を求めた。児童らが積極的に英語を話していた姿やどうしたらうまく伝えられるのかを真剣に考えていた姿、皆で助け合っていた姿が印象に残った。また、児童らに少しアドバイスしただけで、すぐにできるようになったのがすごいと思った等の感想をいただいた。その後、学生らが大学に戻ったあとの教授への事後報告でも、「頼りにされて、やりがいがあった。何としてでも教壇に立てるように頑張りたい。」と言っていたと、その日のうちに教授からメールをいただいた。

(3) 最終調整

２時間目（11 月 15 日）では、リハーサルと発音練習を行った。前回の授業後に、国際交流センターのニュージーランド人の職員のご好意で、紹介文を吹き込んだ音声を送ってもらっていた。その音声を繰り返し聞き、練習をし、最後のリハーサルを行った。

この日、筆者は、児童らに「伝え方」についての話をしたいと思い、準備をしていた。「オンラインミーティングは、誰とでも気軽にコミュニケーションができるツールではある。しかし、表情や声色等によっては、自分の意思に反して、思いもよらない冷たさも伝わってしまう可能性がある。画面の向こうに相手がいるということを感じて、あたたかさと一緒に言葉を伝えられるように工夫してほしい。そのあたたかさって何だろう？」と問うと、児童らからは、「気持ち」「表情」「声音」「ジェスチャー」「たのしい雰囲気」などという言葉が返ってきた。コミュニケーションに大切なことは、英語力だけではなく、ノンバーバルな表現の大切さにも気付いてくれ、交流会の準備はもう整ったと感じた。

3. 交流会当日

ニュージーランドの小学校とのオンライン国際交流会は、11 月 19 日午前中、Zoom を使用し、実施された。６年生２クラスが、各教室でそれぞれ約 40 分間の交流を行った。前々時と同様、交流センター職員には Zoom の接続等で、学生らには児童らのサポートで、参加、協力をしていただいた。交流会当日の実施内容は表１の通りである。

表１　交流会当日の実施内容

時刻		実施内容
６年２組	６年１組	
9:30		Zoom へのアクセス開始
9:40	10:20	始めの挨拶 本校児童らから、学校施設・学校給食と日本の四季折々の行事の紹介 けん玉の披露（６年１組のみ） 交流校児童らから本校児童らへの質問
9:55	10:35	交流校児童それぞれからの自己紹介と歌の披露
10:10	10:50	本校児童らから交流校児童らへの質問
10:20	11:00	終わりの挨拶／交流会終了

まず、学級担任と筆者がニュージーランドの小学校の学級担任と児童らに挨拶をした。続いて、児童ら同士が挨拶をした。その後すぐに、本校児童らから、学校施設・学校給食と日本の四季折々の行事の紹介を行った。そして、交流校児童らから本校児童らへ質問があった。その後、交流校の児童それぞれから自己紹介があり、先生のギター演奏に合わせ

た歌とマオリ語の歌を披露してくれた。そして、本校児童らから交流校児童らへ質問をした。最後に、お別れの挨拶し、交流会は終了した。

本校児童らから交流校児童らへの質問の際、児童らは学生らに英訳等を助けてもらいながら行った。「どんなゲームが好きですか？」や「ニュージーランドで有名な人は誰ですか？」等、児童らは自分たちが言いたいことを思うように英語で表現することができないし、うまく聞き取ることもできないけれど、質問したい児童が多く、たくさんの手が挙がった。積極的に挑戦しようとしたり、あるいは質問に答えしようとしたりしていた。この質問の時間が一番盛り上がりを見せ、実際に交流をしているということを実感した。

4. 交流会実施後の振り返り

1)児童らの振り返り

交流会直後の児童らの振り返りシートには、簡単なアンケートと自由記述欄を設けていた。自由記述欄の内容から、児童らの意識変容について、「外国語学習への意欲」「コミュニケーション力・態度に関する意欲」「異文化への興味・関心・意欲」の３つに整理することができた。以下に、児童が書いたものを抜粋し、そのまま掲載する。まず、外国語学習への意欲については、「英語が聞き取れるようにもっと英語を勉強しようと思う。」「きれいな発音で言うために頑張って発音を聞いてみようと思う。」等、次に、コミュニケーション力・態度に関する意欲については、「ジェスチャーをもっと加えたかった。普段からやっていたら、きっとこういう場面でも役立つと思った。」「自信を持って相手に伝わるように努力したい。」等、最後に、異文化への興味・関心・意欲については、「ニュージーランドと日本の良いところがいっぱい見つかって嬉しかった。」「教室は日本と雰囲気が違うしやっていることも違うしとても新鮮だった。」「実際にニュージーランドに行って向こうの文化に触れて親しみたい。」等、交流会について振り返ってくれた。

アンケート調査結果から、多くの児童がまた交流したい（89.8%）、言いたいことを英語でうまく伝えられるようになりたい（98.3%）、外国の人が言っていることをもっと聞き取れるようになりたい（96.6%）と思ってくれた。そして、自由記述欄では上記したように「外国語学習への意欲」と「コミュニケーション力・態度に関する意欲」について述べてくれた。つまり、また交流したいという気持ちから、そのための手段として、英語力とコミュニケーションに関する点を改善したいという気持ちが、児童らの振り返りにあらわれていた。また、外国の文化や歴史、習慣などについて、もっと知りたいと思っており、異なる文化に触れることは、興味深い体験だと感じてくれた。

2)学級担任らの振り返り

交流会直後、学級担任らには準備期間から交流会当日までの全体を通しての振り返りを自由記述式で記入いただいた。その内容から、主に「交流の重要性」「英語力・指導力の向

上と授業改善」の２つに整理することができた。まず、交流の重要性については、「ただ教科書に沿って授業を行っていくだけでなく、実際に相手がいて、相手に伝えるということが一番大切なことだと感じた。」「英語が話せることが当たり前になっていくかもしれない社会に出ていく子ども達にとって、このような交流ができること自体もっと当たり前になればいいと思う。」等、述べてくれた。次に、英語力・指導力の向上と授業改善については、「自分の知識と経験不足を痛感した。子ども達に指導しようにも、伝わる英語が自分にもわからなかった。」「今回一番感じたことは自分の英語力のなさと日本の外国語教育のレベルの低さだった。他の色々な国では当たり前のように英語が話されているということを考えると、少し焦りを感じる。子ども達に、もっと話せるように、もっと聞き取れるように、もっとコミュニケーションが取れるようにするためには、授業をどうしたら良いのかを改めて考えさせられた。」等、述べてくれた。

以上の学級担任らの振り返りから、外国語の授業では相手意識と目的意識を持つことの重要性やこのような交流の機会の必要性について考えてくれた。さらに、児童らの学習意欲からも、どのようにすれば児童らに交流に必要な英語力やコミュニケーション力を身につけさせられるのかという指導力や授業に対する課題意識を持ってくれたのだと考える。

5. 筆者の省察

ここでは、国際教育のねらいと外国語学習の視点から、省察と改善点を述べていく。

初めにニュージーランドについての調べ学習をし、その後、日本についての紹介準備を行った。この手順だったからこそ、交流会を成功させることができ、この授業展開については評価できると考える。まずニュージーランドについての調べ学習をすることで、「聞きたい」「知りたい」「見たい」等の相手に対する興味や、自分達のことも「伝えたい」という気持ちが児童らに芽生えた。これらの「交流したい」という強い気持ちや交流が「楽しみ」だ、そして「成功させたい」という気持ちが、準備段階での積極的な姿勢や主体的に取り組む態度、また交流会当日の積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度につながったのだと考える。つまり、この調べ学習後の「交流したい」という児童らの気持ちが出発点になり、本交流会の成功につながった。また、相手にも「楽しんでもらえるようにしたい」「話が合いそうだ」等のニュージーランド人への親和性は相手を尊重する気持ちや親切な態度のあらわれであり、これは相互の伝統や価値観を尊重しつつ、違いを違いとして認識し、創造的で、よりよい人間関係を作り出そうとする態度・能力、つまり、国際教育のねらいである「①異文化や異なる文化を持つ人々を受容し、共生することのできる態度・能力」（文部科学省，2005，p.2）に相当すると考えられる。ただ、それが、なぜ、いつ、どのタイミングで、どのように芽生えたのか、あるいは元々内在していたものが引き出されただけなのかを探る必要があり、今後振り返りシートの改善を検討する必要がある。

そして、調べ学習後の「交流したい」という気持ちの中には、「日本のことを伝えたい」「日本との違いを伝えたい」「いい国だと思ってもらいたい」等の自分達の国についても「伝えたい」「知ってもらいたい」という気持ちがあった。これらの表現には、相手の文化を否定したり、自分達の文化を押し付けたりすることなく、互いの違いを受け入れようとする態度が含まれていると考える。つまり、異文化や異なる文化を有する人々に対して敬意を払い、理解し受容したり、自国やその歴史、伝統・文化を理解・尊重したりする態度のあらわれであり、国際教育のねらいである「②自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立」（文部科学省，2005，p.2）につながる態度・能力であると考えられる。しかし、自らの国の伝統・文化に根ざした「自己の確立」を確証するにあたっては、児童らのどのような表現や態度から汲み取ることができるのかを研究する必要があり、今後の課題である。また、今回は時間短縮のため、日本についての紹介の一部に、教科書の内容を活用したが、児童らにとっては日本について伝えたいことが他にもあったかもしれない。これについても、児童らの主体性を尊重していた場合、違う結果があらわれていたかもしれないと考える。

加えて、相手国について調べ学習をしたことにより、自国について理解・尊重することができただけでなく、どのような相手と交流するのかを知り、イメージできたことで、次のステップとして、その相手に対し、日本のどのようなことを紹介すればよいのかを考えることができたのではないかと考える。これは、外国語教育において重要な観点である「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標として掲げられている「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」（文部科学省，2018，pp.72-73）が養われたのだと考える。

交流したいという児童らの気持ちが本学習の出発点になり、またその結果として、英語力を高めたいという想いが芽生えた。本交流会が児童らの学習意欲を高めたと言えるだろう。しかし、交流会当日の互いに質問をし合う時間では、質問したいことはたくさんあったが、児童らだけでは質問をしたり、答えたりすることができなかった。また、質問文等に関しては、児童らの思考力・判断力を尊重し、事前に準備することはしなかった。国際教育のねらいである「③自らの考えや意見を自ら発信し、具体的に行動することのできる態度・能力の育成」を目指すための改善として、児童らの考えや意見、気持ち等をきちんと英語で伝えられるようになるために、既習の知識・技能の定着を図る必要がある。

また、交流の形式や内容等についても課題は残る。クラス全体での交流ではなくグループ活動にして、個々人がたくさん交流できる時間を設けることや回数を重ねる等の改善ができると思う。しかし、これに関しては、学校内の通信環境や相手校の都合にもよるので、慎重に検討していく必要がある。そして、もっと児童らの学びを広げたり、深めたりするためにも、また学級担任の役割を明瞭にするためにも、総合的な学習の時間のねらいや評価等の内容についても理解し、教科・科目横断的な活動にするための検討が必要である。

おわりに

児童らは、英語を手段として、交流という目的を達成することができた。今後ますますグローバル化が進んでく社会の中で生きていく児童らにとって、地球市民としての態度・能力を育むことは必要である。そのためにも、児童らの学びを広げたり、深めたりすることができる国際教育の視点を取り入れた授業を行うことが大切である。今回はコロナ禍の影響もあり、オンラインでの国際交流会を実現させるに至ったが、気軽に世界と繋がれるというオンラインを強みに、今後もこのような活動を継続的に行っていきたい。学校現場の多忙さを考えると、もっと簡単なかたちで、気軽に行えるように検討する必要がある。また、今回、小学校・中学校の英語教員を目指す学生らと一緒に取り組めたことは、大学の地域連携や近い将来の英語教員を育成するという点でも、有意義だったと考える。

引用文献

木村明憲・黒上晴夫・谷口生歩 (2020). 小学校でのタブレット PC を活用した国際交流による資質・能力の変容. 教育メディア研究, 26(2), 1-17.

小泉仁・加賀田哲也 (2020). *Here We Go!* 6. 光村図書出版.

文部科学省 (2005). 初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～. Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.htm (2022.9.2 閲覧).

文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編. 開隆堂出版.

森田裕介・藤木卓・全炳徳・李相秀・上薗恒太郎・渡辺健次…中村千秋 (2005). 日韓遠隔授業における中学生の国際性の変容に関する一分析. 日本教育工学会論文誌, 28(suppl.), 197-200.

Educational Practices Report

An online international exchange meeting and its review: Nurturing a view of international education in elementary school foreign language education

Naoko Ebisujima and Kenji Miwa
(Graduate School for Practitioners of Education, Seisa University)

Abstract

An online international exchange meeting with a New Zealand elementary school was held on November 19, 20XX at a public elementary school ‘A’, 2 classes of 6th grade, one of the schools where the author is involved as a foreign language teaching assistant. The aim of this practice is mainly to nurture children's views of international education and clarify the significance of learning a foreign language, and to create a view of foreign language education for classroom teachers.

Prior to the event, pupils made preparations with the classroom teachers, the pupils’ helpers, and the author. First, we conducted research and gathered knowledge about the partner country, and then made preparations to introduce seasonal events, school facilities, and school events in Japan. After a rehearsal, the exchange meeting was held.

In conclusion, improving English proficiency is not the top priority, but the desire to understand the other person and to be understood by the other person is the motivation for pupils' learning in foreign language learning. In addition, it can be considered as a practice that can be an example of “cultivating an international view of education” from the above viewpoint.

Keywords: elementary school foreign language education, international exchange meeting, international education (international understanding education), cross-cultural understanding, coexistence (live in harmony with), reflection